











「私たちの園では、子どもの主体性を尊重する保育・教育をしています」
…こう言っていれば、すべてが「適切な保育」になりますか？

- ・「主体性」ってなんですか？ (おまけ:「人権」って何?)
- ・「子どもの主体性を尊重する」ってどういうことですか？
- ・「主体性を尊重する保育・教育」は、具体的にどのようなものですか？ 同じように言っている近隣園の保育・教育と何が共通していますか？

社会(少なくとも業界内)でそれなりに共通した「作業上の定義 operational definition ★」がない言葉は、主観的に(都合よく)使われるだけ。

★辞書的な定義ではありません。「保育の安全」(検索)→「安全」→8-1(災害)→「想定力を身につける」の中に「作業上の定義」解説PDFを置いてあります。


子どもは生後すぐから「自分」を感覚し、「自分(と自分ではない存在=他者)」を理解し、自分と他者/周囲(世界)との関わりを学ぶ過程にいます。この過程に不可欠なのは、「自分、そして周囲に対する信頼感の構築」。

- ・生まれたばかりの乳児にとって、世界はわけのわからない混沌 
- ・  を伝えたい → 泣(鳴)くか、笑うかしかない
- ・「おなか、すいた？ ミルクかな？」という声とミルク →  が解消
→  を泣(鳴)いて伝えると  が解消するという体験のくり返し
→ 自分自身の感覚  への信頼感(言葉、概念の獲得にもつながる)
→ 伝えることで  は解決されるという信頼感、解決してくれる存在への信頼感(排尿・排便⇔おむつ。も同じ)
- ・  泣いても応答がなかったら？ または、おとなの時間(都合)で…ミルクが出てきたら？ …おむつを替えられたら？ …寝かされたら？ …起こされたら？ 上記の根本的な信頼感が育たない
 - 自分の感覚  に対する信頼が育たない(応答がない=感覚に名前がつかない)
 - 周囲に対する信頼が育たない(完全なネグレクト状態では、赤ちゃん、子どもたちは  があっても泣かなくなる。ルーマニアのチャウシェスク政権下の子ども収容施設で観察された事実。コミュニケーションができていると子どもが生得的に感じていれば、泣く)

★人間の赤ちゃんは人間である以前に、生き物(動物)です。あなたが捨て犬や捨て猫を飼い始めたらどう関わるか、考えてみてください。

・安全面でも問題

- 嫌いなものも食べて！ → 誤嚥窒息の原因に
- 食事時にはもう眠い。または、まだ空腹でない → 誤嚥窒息の原因に
- とにかく眠って！（うつぶせにする） → 睡眠中の死亡の原因に

・自分の  が周囲のおとなに理解・応答されて、適時に適切な対応をされて未就学児期を育った子どもは、自分と自分の周囲（世界）を信頼に値するものだと認識する

・自分と自分の周囲（おとな）に対する信頼があって初めて、「私自身の意志として、この人の言うことを聞いてみよう」と感じ、そのように行動する

★もちろん、以上のことは家庭が基本。でも、11時間以上保育なのだから、園が果たす役割は大きい。こうしたことを園から家庭にも伝えていけるよう、資料を出していきます（2022年度）

いわゆる「不適切な保育」や「職員による虐待」を予防する

状況を変えよう、改善しようという時、不可欠な4点

- ・（「不適切な保育はいけない」という）意志を伴った認識 awareness
- ・（何が不適切な保育かという）知識 knowledge
- ・（不適切な保育をせず、より良い保育をする）スキル skills
- ・実際の行動 action

1. 認識は…あるでしょうから…

2. 知識は勉強してください

- ・未就学児、特に3歳未満は上記のような信頼感をもとに自分の存在を肯定する基盤を作る時期だと、科学的な裏付けをもとに理解すること

例：1～2歳児に「イスに座って先生の話聞きなさい」と言うのは？

- ・保育の専門職として不適切な関わりについては、たとえば、『改訂 保育者の関わり方の理論と実践』（高山静子、2021年、郁洋舎）

例：脅し、行動や人格の否定、罰の示唆、保護者の否定、執拗に長い説教、

乱暴な言葉、謝罪の強要、あきれ、ひやかしやからかい、子ども同士
の比較 (同書 96、97 ページ)

・ なにが差別？ 偏見？ (子ども、保護者、職員を傷つける)

- × 「外国人」「日本人」という言葉が無意識に使う
- × 保護者に国籍を聞く ⇔ ○ 「あなたが日常使っている言葉は何語？」
- × 「男の子だから」「男の子なのに」「女の子だから」「女の子なのに」
(社会的性別による得手不得手を決めつけない。関心を押しつけない)
(性別違和感は、「男の子」「女の子」をおとなが言い、子どもの意識にも
のぼり始める3歳ぐらいから出てくる場合も)
- × 容姿や体格について言う (「かわいい」「かっこいい」「やせている」等な
らいい？ いいえ。あなたはほめているつもりでも…)
 - 「お父さんとお母さん」は、今、すべての子どもにはあてはまらない
 - 「なんでAちゃんは肌が黒いの？」「Bくんは髪の毛が金色なの？」と他の
子どもに聞かれたら？
 - 散歩の途中、すれ違った人を見て「あの人、腕がないよ！」と子どもたち
が言い出したら？
 - 早く気づくことが重要な特徴に気づくための知識を持っていますか？
(色覚多様性。聴力障害。読字障害。成長曲線から読み解く変化等)
 - ★色覚多様性については、「保育の安全」→「安全」→2-5

・ 自園で不適切な保育や虐待が起きている時、目をつぶっていたらどうなる
か？という知識

3. スキル(※) : 最大の問題。「頭でわかっているてもできない！」(ワークは別添資料)

・ あたたかく、やわらかく、ゆっくり言葉を発する訓練

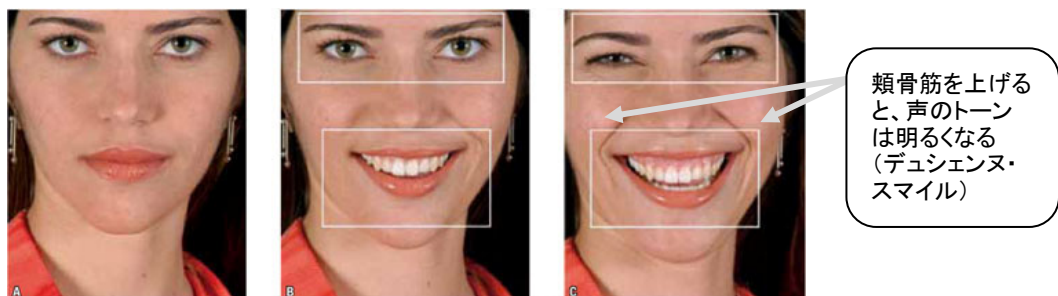


FIGURE 16 - Resting position (A). First stage of the smile - Social smile (B). Second stage of the smile - Spontaneous smile. Notice that in this stage the patient's eyes are half-shut. (C).

- ・言葉でパッと応えずに、一度受けとめる訓練（「あ行、は行」）
- ・職員同士で練習する
- ・職員同士で指摘する
 - ★「言われちゃった…。自分はダメなんだ」ではない。「言われたから傷つく」と「傷つくことを言われた」の違いは、「保育の安全」→「その他」→研修会資料の中の「コミュニケーション＋心を守る」1ページめ
- ・指摘された時に「自分はそんなつもりで言ってない」「ちゃんとやってる」と言わない
(あなたがどんな「つもり」かは関係ない。まわりにそう見えるのだから。コミュニケーションは、受け取る側次第。そして、「そんなつもりではない」を言い続けていたら、誰も指摘してくれなくなる)

※適性 (ability。例：運転適性検査)、知識や技術 (学び、身につけるもの)、スキル (知識や技術を使う応用力)、コンピテンシー (前述のすべて+いろいろを活かして仕事を成功裡に進める力)。たとえば、生まれつき速く走れる (適性) 人がそのまま競技選手になれるわけではない。競技のための知識+技術。それをもとに「今日、この状況ではどう走るか」を判断して実行できるスキルが必要

行動変容の基本：自分で意識できないこと
(気づいていないこと) は変えられない！
意識して、「変えよう」という動機を持ち、
変える行動を少しずつしていけば、変わる。

自分の言葉を意識する＋変える（＋言葉の貧困化を防ぐ）（「3000万語の格差」資料から改変）

- 1) いつも同じ言葉を使っていることに気づく。言い換えや選択肢を増やす、思い出して使う（メール等の書き言葉のほうが気づきやすい）
 - ・了解、りよ、り→ []
 - ・すみません
→ ありがとう ～ ごめんなさい／申し訳ございません
 - ・お疲れさま（挨拶がわりに濫用しない）
→ おはよう（ございます）～こんばんは。お世話になってます等
(×ご苦労さま)

2) おとな間の言葉を貧困化させない

ひんぱんに使っているあいまいな言葉には具体的な記述を必ず足す

- ・やばい、ビミョー、もやもや…

「それってやばい！ あ、おいしいってことです（＾＾）」

「運動会を父母参加でするので…ビミョーですね…。あ、やめたほうがいいのかなくて。どうしてかというと…」

3) 子どもにかかる言葉を具体的にする

- ・「こそあど言葉」を減らす

知っている名詞、動詞、形容詞、
擬音語、擬態語を使いましょう！
「言葉を増やす！」ではなく、「言
葉を減らさない！」。使わなけれ
ば、言葉はどんどん減るばかり。

- ・繰り返している言葉や具体性のない言葉には具体的な記述を必ず足す

例：じょうず、すごい、かっこいい、すてき…

「じょうず！」→「ひっかからないで跳べたね！」

「きれいだね」→「青い色がとってもきれい」

「すごい！」→「もう食べ終わったの？ おなかすいてたんだ！」

4) 子どもにかかる言葉を貧困化させない。豊かにすることで差別を避ける
決まりきった言葉を使っていると、おとながかかわりを持たない子どもが出てきてしまう。具体的な記述は、誰に対してでもかかわりをつくらることができる。

- ・「じょうず」「えらい」等は特に、特定の子どもに使う言葉になる。
「ほめられたいから従う」という感情を子どもたちに生んでいる？
- ・「かわいい」「かっこいい」を、女子、男子に分けて使っている。

「具体的な記述」とは？（『3000万語の格差』から）

子どもとかかわっている中で…（チューン・イン必須！）

1. おとな自身が子どもにしていることを記述する
2. 子どもがしていることを記述する

何を記述したらいいかわからない？

…色、形、におい、触感。

…子どもが言った言葉から増やす、言い換える。

★今日からできる園内ワーク

人間は、相手の声のトーンから感情を読み取ります。話す内容以上に話すトーンが重要なのはこのためです。特に、日本の文化の中で育つと相手の言葉の背景や「行間」を読もうとしがちで、その時々声のトーン（怒っている？喜んでいる？悲しい？など）は大きな判断材料となります。声に怒りやフラストレーションのようなネガティブな感情を感じると、人は「怒られる！」「怖い！」と感じ、その後の話の内容をしっかりと受けとめることができなくなります。自分の声のトーンはどんな感じなのか、自分の声のトーンは人にどう受けとめられるのか、まずは体験してみましょう。

① 電話のワーク

2人組になります。1人が電話の着信音を口で模してください。もう1人が着信音に応じて、「はい。〇〇園の〇〇です」と出ます。この時、「明るイトーン」と「暗イトーン」で電話に出るように意識してみてください。電話の着信音役の人は、電話に出た人の明るいトーンと暗イトーンの違いを意識してみてください。役割を交替して、繰り返してください。

トーンの違いを意識すると、明るいトーンの時には、頬の頬骨筋がしっかりと上がって笑顔になっていることがわかります。違いがよくわからないのであれば、頬骨筋をしっかりと上げた状態（＝真の笑顔 [4]）と、頬骨筋を思い切り下げた状態（＝能面）で電話に出て、



[4] 頬骨筋をしっかりと上げると口角も上がって口が開き、さらに目のまわりの眼輪筋も動いて目尻にシワが寄ります（＝目が笑う）。これが、「真の笑顔（デュジエンヌ・ヌヌイリ）」です。笑顔と声のトーンに関しては、NPO法人保育の安全研究・教育センターのウェブサイトを「トピックス」。

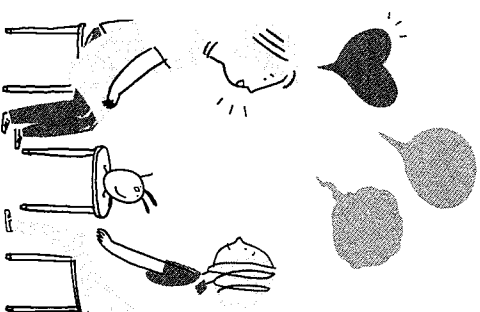
声のトーンの違いを意識してみましょう。
声のトーン（明るさ）は、喉ではコントロールできません。声のトーンを明るくしようと思ったら、頬骨筋を上げるしかないのです。人間は笑う生き物ですから、頬骨筋を上げて「真の笑顔」になるとは誰にでもできます。

② 名前を呼ぶワーク

3～4人のグループをつくります。1人が「名前を呼ぶ人」、別の1人が「名前を呼ばれる人」、残りの人は「観察者」。役割は順に交替していきます。

名前を呼ぶ人は呼ばれる人に向かって座り、その人の名前をいいるなトーンで呼びます。名前を呼ばれる人は、呼ばれたらその都度、「今のは、かなりネガティブ（な感情が入っているように感じた）」「今のは、少しポジティブ（な感情だった）」など、感じたままを伝えてください。観察者もどう感じたかを伝えてください（同じトーンでも人によって解釈が違い、自分が名前を呼ばれるのか、他人が名前を呼ばれているのを聞くのかで解釈が異なるからです）。

頬骨筋を上げて「真の笑顔」で呼びかければ、誰でも間違いなくポジティブな（明



るい) トーンになります。逆に、喉に力を入れたり、肩間にシワを寄せたりして呼びかければネガティブな(暗い) トーンになります。ただし、笑顔とは異なり、ネガティブな感情を声で表現する時の顔やからだの動かし方は人によって異なります。

ここで大事なものは、自分の声のトーンを意識して実感すること。そして、中間のトーン、つまり「相手に『怖い』『怒られる』と感じさせず、だからといって『過度にポジティブ(わざとらしく明るい)』とも感じさせないトーン」で呼びかける時の自分の声のトーンを知り、それを再現できるようにしていくことです。

誰かにまじめなアドバイスをしたい時、最初の呼びかけでネガティブさを発信してしまったら、相手は心のドアを閉めてしまえます。だからといって、これからまじめな話をしようという相手に、笑顔の明るい声で呼びかけるのも奇妙です。自分の中間のトーンはどんな感じなのか、体験して体得してください(このワークは、とても難しいですよ!)。

③ 楽しい話を聞くワーク

3~4人のグループになります。1人が話をする役、1人が話を聞く役、他の人は観察役です。話題はなんでもかまいませんが、軽く明るいテーマにしてください。たとえば、「先週1週間に食べたおいしいかったもの」「先週見た楽しいテレビ」などです。1回の話は3分ぐらい。役割を交替して進めましょう。

話をする人は、なんでも自由に話をします。話を聞く役になった人は、あいづちを打ちながら真剣に聞きます。そして、「ここは大事だ」と思ったところできつかりとした「真の笑顔」でうなずきましよう。絶対に、話に割り込んではいけません。うなずくか、「そうなんだ」「へえ～」といったあいづちを打つだけです。

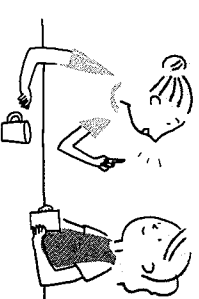
この時に意識するのは、話を聞く人の表情がめりはりの効いた形で動いているかどうかです。ずっとヘラヘラ笑っていないか、笑顔があいまいではないか、観察役の人たちもしつかり見て、終わった

らアドバイスをしてください。なかには、人の話を聞く時にずっと笑みを浮かべている人もいます。あいづちや返答の声が笑っている人もいます。これは「ヘラヘラしている」という非常に悪い印象を相手に与えますから、やめましょう。「笑顔をしっかりとつくる」と「ヘラヘラ笑う」は、まったく違います。あいさつであれ、会話であれ、「真の笑顔」になった時、表情はしっかりと笑顔を浮かべますが、声は笑いません。

④ 子どもや保護者に対する声かけをチェックしよう

日々の保育の中で、それぞれの声かけのトーンをチェックします。最初は1~2週間の期間を決めて、「立場や年齢、経験は関係なく、必ず言ってあげて! 私にも必ず言ってね」と園長やリーダーが主導します。これには、声かけのトーンを自分で意識できるようにすると同時に、年齢や立場の壁を越えて指摘やアドバイスをすることに慣れ、指摘やアドバイスをされることに慣れる目的もあります。この文化は、指摘することも非常に不得意で、なにか言われるとすぐに「嫌われた」「怒られた」と個人的にとっしてしまいがちです。指摘すること、されることに慣れましょう。

「先生、今の声かけはやさしくて、歯切れが良かった! 」と言う時はポジティブな(明る



い) トーンになると思います。「先生、今の○○ちゃんへの声かけ、ちよつと厳しかったと思う」と言う時は、ネガティブな(暗い) トーンにならないよう、クーク②の「中間のトーン」を意識して。

指摘された側も、「そんなこと、なかったわよ!」「あなただって、できないくせに!」と怒ってはね返したりは決してせず、「そうだった? 言ってくれてありがとう。今度はもうちよつとポジティブにしてみるから、また言ってね」と(内心はムツツとしていても、声は明るいトーンで)感謝しましょう。とにかく、感謝して受けとめるトリーニングです。

「あ、今のは怖かったかな」「先生、怒ってる〜」って子どもに言われちゃった、やっぱり!、日々のそんな気が少しずつ、行動変容に結びついていきます。「すぐに完璧になる!」を目指し、ちよつとでもできないと「私はダメだ」と諦めてしまうのは、この文化の中で育った人に多くみられる悪い癖でもあります。「急がず、少しずつ。ちよつとでもできたら自分をほめてあげる。他人もたくさんほめる。そうすると、自分もほめてもらえて嬉しい」…、これがコツです。

園長やリーダーだけでなく、立場や年齢が他の誰かより少しでも「上」の方は、常に自分に言い聞かせてください。「言ってもらえてありがたい。言われなくなったら、私は『裸の王様』だから」と。中間のトーンで指摘することに慣れ、指摘されることに慣れ、指摘に「ありがとう」とまずは答えられるようになることは、「自分自身の成長のため」の第一歩です。



「わかった?」のひと言が生み出す厚い壁

保育現場には、「壁」をつくってしまうコミュニケーションも存在します。そのひとつが「わかった?」という言葉です。

誰かになにかを教えたり指示したりした後、「ね、わかった?」と聞いたり、「わかったでしょ」と言ったりしていませんか。「え、言うかなあ…」、自分が言っているかいないかに気づくことが最初の一步です。おそらく誰もが言っているはずですが、無意識に出る言葉なのでそうそう気づいてはいないでしょう。

「わかった?」、あなたより立場が上の人から、あなた自身がそう尋ねられたらなんと答えますか? 「はい…」 「わかりました」 ですよね。たとえ、「この人の説明、よくわからないなあ」と思っても、そう答えるはずですよ。なぜなら、この文化の中で育つと、そう簡単には「わかりませんでした」「もうちよつと説明していただけませんか」とは言えないからです。

…ということは? あなたが誰かに対して「わかった?」と聞いた瞬間、コミュニケーションが終わっている可能性もあるのです。「わかった?」「わかりました(わからなかったけど、そう言っとかなきゃ…)」「そう、じゃあ、そういうふうにしてね」「はい(よくわかんないけど、まあ、いいや)」。

でも、相手はわかっていないのですから、同じ失敗、同じ間違いが必ずまた起こり、「ちよつと! この前、教えたじゃない。わからなかったの!」となります。こうなると、相手は「怒られている」としか感じず、あなたが話している内容など聞いてはいません。相手には「わからない」「怒られている」という気持ちが育ち、あなたには「なんでもわからないの」「こんなに言っただけなのに」という気持ちが育ち…。感情のしこりだけがお互いに大きくなり、コミュニ

掛札逸美

心理学博士（社会／健康心理学）：専門は安全の心理学、コミュニケーションの心理学

- 「保育の安全」サイト（「保育の安全」で検索。Facebookのリンクもここにあり）：
<https://daycaresafety.org/>
- Facebook ページ（新型コロナ関連の情報、ひな型等）：<https://www.facebook.com/daycaresafety/>

略歴

1964 年生まれ。筑波大学卒。（公財）東京都予防医学協会広報室に 10 年以上勤務。

2003 年、コロラド州立大学大学院心理学部応用社会心理学科に留学。健康心理学を専攻。2007 年 1～2 月、世界保健機関（WHO）協力機関・カロリンスカ研究所／医科大学公衆衛生学部社会医学部（ストックホルム）が開催する「国際傷害予防集中コース」（5 週間）受講。2008 年 2 月、心理学博士号取得。同 5 月卒業、帰国。

2008 年 6 月から 2013 年 3 月まで、産業技術総合研究所特別研究員。

2013 年 4 月、NPO 法人保育の安全研究・教育センター設立・代表理事。2020 年 3 月、NPO 格を返上し任意団体化。

委員等

「平成 27 年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員（内閣府、厚生労働省、文部科学省）

「千葉県社会福祉審議会児童福祉専門分科会施設部会 保育に係る重大事故検証委員会」委員長（2016 年 12 月 26 日～2017 年 8 月 31 日）。現在も同委員。

主な（共）著書、訳書

